

～取材を終えて～

一流選手は内面も違う

学生記者 内藤伊音(商1)

私も一応、中学・高校と6年間、バレーボール部に所属していた。全日本代表の石川選手はあこがれの存在だ。雲の上の存在でもある。

取材前日は緊張が高まった。トップレベルで活躍中の学生選手とは、一体どんな人なのか。想像が全くつかず、世界でも注目されるほどの選手なのだから、きっとバレーボールにすべてを懸けているのだろう、と勝手なイメージを抱いていた。

実際にお話を聞くと、将来のことを具体的に考えていることがわかった。プロ契約を返上し、学生留学を選んだのも「この先、バレーボール一本だけでやっていけるとは限らない」との冷静な考えからだ。「学生として留学する」。石川選手のこの言葉が印象に残った。

バレーボールに対する意識の高さと熱意にも感銘を受けた。短期留学中、比べるのもおこがましいが、私だったら圧倒されるだけで終わってしまう。石川選手はチームメートの

いいプレーだけではなく、弱点もしっかりと観察した。

「日本もここを狙えば勝ち目がありそうだ」と考えていたという。自身にも他選手に負けない高い技能があるからこそできる分析なのだろうが、全く新しい、言葉も思うように通じない環境下、常に日本バレーボール界を思いながらプレーするという姿勢は誰もが示せるものではない。

石川選手には堅実さも見てとれた。いきなりオリンピックを目標にもっていくのではなく、まずは大学リーグ戦勝利に向かって進むことが大切。一つ一つの試合を重ねていく先にリオ五輪、そして東京五輪がある。

日本バレー界への熱い思いやひたむきさを知り、一流選手というのは高い運動能力のほか、内面もまた普通の人とは違った輝きを放っているのだと痛感した。中大バレー部、日本バレーの活躍がますます楽しみになる取材だった。



左から石川選手、内藤記者、西村記者